教えてセンセイ

武藤康弘先生に聞く〈縄文時代の話〉

縄文時代は自然に寄り添い、精神的にも豊かな、共助の時代でした。

武藤康弘さん

（むとうやすひろ）

武庫川女子大学文学部教授。専門は考古学・文化人類学・民俗学。1959年秋田県生まれ。1985年國學院大學大学院修士課程を修了。1987年東京大学助手として採用され、1997年に博士(文学)を取得。1999年奈良女子大学文学部助教授となり、2011年に教授、2024年に名誉教授。2024年4月から開設された武庫川女子大学文学部歴史文化学科の学科長をつとめる。授業では、実物の土器や石器に触れることを心がけており、少年時代に拾い集めた土器や石器を現在も教材として使用している。

1万年以上、平和が続いた縄文時代

かつて日本列島には縄文人と呼ばれる先人たちが住んでいました。近年、彼らが生きていた縄文時代に関心を持つ人が増え、ちょっとした縄文ブームが起こっています。謎めいた縄文時代の魅力についてお話ししましょう。縄文時代は約1万5千年から約2400年前まで続いたと考えられ、時代区分として1万年以上続きました。これだけ長い時代は世界史においても珍しいものです。食糧は狩猟採集に頼っていましたが、日本列島は自然環境に恵まれているので、海や山の幸を利用しながら、外からの侵攻に怯えることなく、安定的に暮らしていたと思われます。そもそも人口が少ないので奪い合うことがありません。もっとも多いとされた縄文時代晩期で26万人程度と推計した研究者もいます。

とはいえ1万年以上続いた時代なので、何度も大きな自然災害に見舞われています。それを裏付ける事象が福井県若狭町の景勝地・三方五湖にあります。五湖のうち、もっとも大きい水月湖は湖底に堆積した泥の層が7万年分以上残っている奇跡の湖といわれ、泥の層＝年縞（ねんこう）が1年に0.7㎜ずつ規則的に積もっているため、縞の数を詳細に調べると過去の気候変動などが解明できます。それによると約7300年前に屋久島の北側で海底火山が噴火し、東北地方まで広く降灰したことがわかりました。巨大噴火によって津波も起こるなど九州あたりは壊滅的な状態になったと思います。それを縄文人は乗り越えてきたのです。彼らのたくましさは骨格などを見ても想像できます。平均身長（成人男性）は158㎝と小柄ですが、がっしりした体格で顔の彫りは深く、えらの張った四角いあごでソース顔と呼ばれる濃い風貌です。

縄文人は木の実などを主食とし、植物質の食糧を安定的に確保することが何よりも重要でした。石の鏃（やじり）や罠などで獲る動物や魚介類だけではお腹は満たされませんからね。食事は木の実をそのままボリボリかじっていたわけではありません。アクなどを抜いてすり潰してでんぷんをとり、丸めて鍋で煮たり、蒸し焼きなどの調理をしていました。山形県の押出（おんだし）遺跡では縄文時代のクッキーが発掘されています。豆の栽培もわずかにやっていたようですが、青森県の三内丸山（さんないまるやま）遺跡の近くに栗だけの森が見つかっており、大きな実をつける栗の木を大事に育てていたと思われます。ただ、ひとつの資源に頼ると全く収穫できない年もあるので、どんぐりやトチの実、栗などを補完しあいながら調達したのでしょう。

縄文時代は弱者を守る、共助の時代だった

縄文人は土器を作ることに強くこだわっていました。数が多いだけでなく、仕事が細かいのです。縄文という名称は土器の表面に付けられた模様が由来ですが、単なるデザインではありません。この頃の土器は輪積みといって同じ径の粘土の輪を積み上げて成形しますが、継ぎ目に縄目を入れたほうが接合が安定するため、樹皮の繊維で編んだ縄や木の棒で模様を入れていました。縄文土器は時代とともに形状や模様が変化し、中期に作られた派手な装飾の火焔型（かえんがた）土器は、新潟県で多く出土しています。複雑な形状や突起などがあると乾燥や焼成の際にはがれ落ちるものですが、縄文人は高度なテクニックを身につけていたのです。数の多さで驚くのは三内丸山遺跡で、土器の破片が2m以上積み重なっています。

縄文時代は自然物に魂が宿ると考えるアニミズムが信仰され、その祭祀に使われたのが土で作った人形の土偶です。土偶は妊娠した女性をかたどったものが多く、出産は命がけだったので安産祈願を目的に作られたと考えられます。土偶はほとんどバラバラの状態で見つかっているので、人の身代わりとして壊すなどの破壊的な供儀が行われたのでしょう。山梨県の釈迦堂遺跡からは千点以上の土偶が見つかり、祈願しながら土偶を壊し、その欠片を捨てつつ村の周囲を回ったことがうかがえます。

縄文人は縁者で小さな集落を形成し、集団で狩りや採集を行い、食糧を平等に分け、助け合いながら生きていました。特筆すべきはけがや病人の介護など、障がい者福祉の形跡が見つかっていること。北海道の入江貝塚では、ポリオないしは筋ジストロフィーによって幼少期から動くことができず、手足の骨が異常に細い青年の骨が発掘されています。さらに富山県小竹貝塚では大腿骨に骨折の治癒痕跡のある壮年男性の骨が発掘されています。このような事例から、動けなかったり歩けない状態の人を周りが世話していたことが想像できます。縄文時代は生存競争に明け暮れたギスギスした野蛮な社会と思われがちですが、そうではなく一蓮托生というべき、共助の時代だったのです。これが弥生時代になると稲作によって土地や水をめぐる争いが起こり、貧富や身分の差が広がっていきます。戦争で虐殺された骨も見つかっています。

自然と折り合い、たくましく自給自足していた縄文人。土器や土偶の創造性やおしゃれなアクセサリーを見るかぎり、精神的に豊かで複雑な人間関係によるストレスもなかったのだろうと思います。縄文時代の全容が明らかになるにつれ、「この時代、おもしろそう」とハマる人が増えています。2021年、北海道・北東北の縄文遺跡群がユネスコ無形文化遺産に登録され、東日本は縄文時代の話題で盛り上がっていますが、関西では反応が薄いですね。特に大阪市内は上町台地を除く大部分が縄文時代、海や湿地帯だったので、人が住める環境ではなかったのと、古墳時代以降の遺跡が積み重なり、縄文時代の爪痕が破壊されて残っていないからだと思います。もちろん関西にも縄文遺跡はあります。琵琶湖周辺や湖底、生駒山の西麓や奈良盆地の南部には縄文遺跡が比較的集中しているので、縄文人の生きた証が感じられることでしょう。

共生の知恵を持っていた縄文時代、ここに現代を生きるヒントが見つかるかもしれません。

写真上／武藤先生が学生時代、秋田高校の裏山で見つけた縄文土器の破片。「崖から出ているのを発見。その後、県の調査で一帯に縄文遺跡があることがわかりました」

写真上／青森県で出土した縄文土器（深鉢）。全体に杉綾状の美しい縄文が施された当時の鍋で、内側にはオコゲが大量に付着。上部にある2つの小さな穴は、ひび割れを紐で縛って補修した跡と考えられる。

写真左／火山ガラスに分類される黒曜石。九州には良質の黒曜石の産地があり、朝鮮半島や琉球まで運ばれた。規則的に細長く割られた石は、鏃やナイフなどの素材に使われた。